

1848／49年革命150周年で祝われたもの

村上俊介

はじめに

昨年1998年は1848年3月革命150周年にあっていた。同革命は翌1849年ドイツ国憲法闘争における各地の民衆による武力決起を経て7月23日バーデン革命軍最後の砦ラーシュタット陥落まで続くので、本年1999年もこの革命150周年の範囲内にある。1848／49年革命と呼ばれる所以である。とはいえ、多くの記念の催し物は1998年で一区切りついた。この革命はもともとフランスの2月革命に端を発し、ドイツ、イタリア、ポーランド、そして当時のオーストリア帝国に属していたチェコ、ハンガリー、そして帝国の首都ウィーンにも革命の波が覆い被さったヨーロッパ規模のものである。しかし振り返ってみると、150周年を記念する催し物は、とりわけドイツで華々しく、その他の国々ではいたって静かであった。増谷英樹氏の革命150周年に関する論文によると「(1998年)7月に訪れたウィーンでは、本屋のショーウィンドーはむしろ皇帝フランツ・ヨーゼフの皇后シシーの暗殺100周年が占領し、1848年の革命は片隅に追いやられていて、地味な存在でしかなかった」¹⁾、とのことであるし、催し物としてはユダヤ博物館で3月13日から5月3日まで「1848年、宿命的な革命」と題する特別展示があったものの、その他目立った催し物は目に付かなかった。革命の一つの中心でもあり、良知力氏や増谷氏の功績で日本においてもその内実がよく知られるに至ったウィーンですらそうであるし、フ

目次

はじめに	1
1. 1848／49年革命150周年記念展覧会のテーマ	2
2. 1848／49年革命150周年関連著書の三つの傾向	10
3. 「ドイツの特殊な道」テーゼからの撤退?	17
〈編集後記〉	30

ランスからの目立ったニュースも知らない。筆者の見落としもあるだろうが、少なくともドイツの「催し物ラッシュ」は他の諸国にないものだった。

特別展覧会の主要なものとしては、2月22日から8月2日までカールスルーエにて「1848／49年―バーデンにおけるドイツ民主主義者の革命」と題する展覧会。これには538ページのカタログが同時に出版されている²⁾。そして5月18日から9月18日までフランクフルト・アム・マインで開かれ、「自由への出発」と銘打たれた最も規模の大きな展覧会。これも465ページのカタログを出版している。インターネット³⁾で調べると、2、3の演劇、シンポジウムを含む展覧会の数は昨年40。もっとも520ページのカタログを有するラインラントの「請願とバリエード、ラインの1848／49年諸革命」と題する展覧会はリストから漏れているから、数はもっと多くなるだろう。また同様にラジオ、テレビの特別番組は42、そして出版物に至るや、1998年出版が47冊、1997年が37冊、その他数年前の出版物が29冊確認できる。もちろんこれがすべてではない。シュピーゲルによると南西ドイツだけで600もの催し物が計画されていたとのことである⁴⁾。

どこよりもとりわけドイツで盛り上がった、このあふれんばかりの1848／49年革命150周年、では何をどのように祝ったのか。

1. 1848／49年革命150周年記念展覧会のテーマ

1998年5月18日フランクフルト・アム・マインのシルム・クンストハレで1848／49年革命150周年記念展覧会が始まった。最終日は9月18日。テーマは「自由への出発」。開催初日の日付5月18日は1848年の同日、パウロ教会で麗々しくフランクフルト国民議会が開会された日であり、最終日の9月18日はフランクフルトにおける民衆暴動の末、右派の二人の議員が殺害され、議会は連邦軍に暴動の鎮圧を要請したその日である。シュレスヴィヒ・ホルシュタインを巡る対デンマーク戦争をプロイセン主導で休戦（マルメ休戦）したことに対して、議会は民主派の猛烈な反対で一度は不承認の決議をしたものの、一転、この休戦協定を僅差で承認した。これに対して民衆の不満が爆発したのがこの暴動のきっかけであった。それゆえこの日が同議会の事実上の終焉（正式な解散は1849年6月18日）を意味すると同時にドイツにおける1848／49年革命のターニング・ポイントの日と言ってよい。

記念展覧会開催日、パウロ教会で連邦大統領ローマン・ヘルツォークが記念講演を行なった。彼は言う。「1848年という年は、ドイツの民主主義の歴史の長く続く始まりというだけではありません。かの年はまた、近代の民主主義的ヨーロッパへの途上の決定的な転換点でありました。当時、多くの地で、様々な言語で参加、基本権、自由を求める叫びが響きました」。すな

わち、「19世紀の自由の歴史は、アメリカ、フランス、イギリス、ベルギー、スイス、ポーランド抜きに書くことはできません。しかしまた、まさにドイツ抜きにもそれはできないのです」と。そして「"パウロ教会"は統一・権利・自由を求めるドイツ人の努力の偉大なシンボルの一つであります。そしてわれわれは今日やっと次のように付け加えることができます。1989年のベルリンの壁崩壊がもう一つのシンボルである、と。この二つはドイツの歴史の記念すべき時であります」と述べて、フランクフルト国民議会による憲法と同時にドイツ再統一を称えた。彼は様々な困難を抱えた現在こそ、民主主義が地方・州レベルだけでなく、国際的なレベル、すなわちヨーロッパ議会という形式で、定着しなければならないと主張する⁵⁾。

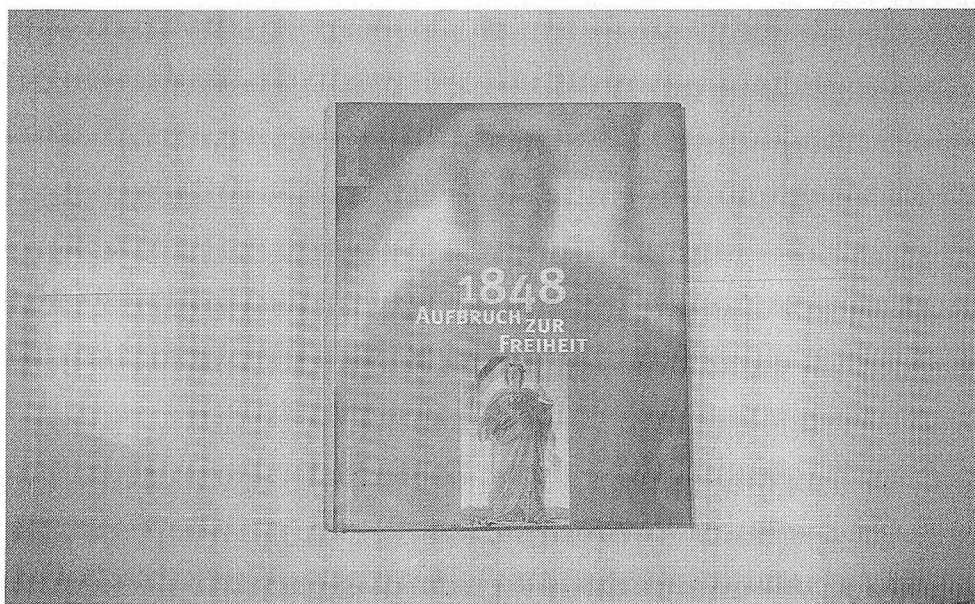
ところで展覧会の学術指導を行なったフランクフルト大学現代史教授でありドイツ初期自由主義研究の第一人者ローター・ガルLothar Gallは、465ページもの大部のカタログの中で、本展覧会のタイトルを「自由への出発」とした意図を明らかにしている。1848年から150年後の現在、ドイツはあの革命をどのように祝うのか。彼は言う、「最初の最も重要な課題は、……『ドイツ国民の基本権』を決議し公表することであった。……この基本権の目録は多くが1919年のワイマール共和国憲法にとってのみならず、その後、全ドイツに通用するようになる1949年の連邦共和国の基本法にとっても模範になった。その中にパウロ教会の後代の勝利が映し出されている。すなわちそれは長き将来のために、国家的・社会的生活の動かし難い基本原則を書きとどめ、自由のために確固とした永続的基礎を創りだすことが重要であるという、すべての代議員たちの一致した確信の勝利であった。」⁶⁾ さらに国民議会がドイツの将来のモデル、すなわち国民代議制、連邦主義、権力分割、法治国家、ドイツ問題の小ドイツ的解決などの原則を作り上げたことを指摘するガルは、最後に「どれほど多くの将来を指し示す理念が今日でも150年前のこの『自由への出発』の中にあり、それをわれわれは現代まで正確に見ると、この過去がいかに生き生きとしているか、これを示すこと」⁷⁾、これが展覧会の課題である、と結んだ。

フランクフルトと並んで、もうひとつの主要な展覧会であったバーデン＝ヴュルテムベルク州によるカールスルーエの展覧会でもその主旨に大きな違いはない。主催者であるカールスルーエ州立博物館長は次のように述べている。「疑いもなく、当時、民主主義者と自由主義者は自由、平等、ナショナルな統一という理念のために戦った。それは今日のわれわれの社会的・哲学的自己理解の根源を形成している。彼らは当時敗北した。しかし彼らの目標と意図は部分的には、1949年のドイツ連邦共和国の基本法への入り口を見い出した。バーデン以外のどこも、同様の民主主義的理想が広く民衆運動の中に定着したところではなかった」⁸⁾。次節で概観する1848/49年革命関連の多様な出版物も、多くはこの視点を軸としている。

一体これはどうしたことだろう。従来、ドイツ1848/49年革命をわれわれは「挫折した革命」

と見なすことを、まずは前提した上で、そこに通底する歴史的にポジティブな、あるいはネガティブな要因を見出そうとしたのではなかったろうか。さらに近年においては、生き生きとした民衆運動への視線が多くの研究を豊かにしてきたのであって、フランクフルト国民議会の詳細な研究やその歴史的評価がこの革命研究の主軸をなしてきたわけではなかった。にもかかわらず、L. ガルはとりわけフランクフルト国民議会の基本権およびドイツ国憲法に傾注した努力と成果をもって、その精神が歴史をくぐり抜け、1919年ワイマール憲法と1949年旧ドイツ連邦共和国基本法の中に再生し、現在につながるというのである。その精神とは、議会制民主主義と不可侵の基本的人権だ、と。

これに対して、むしろ一般のジャーナリズムの方が革命の「挫折」にこだわっているように見える。昨年2月『シュピーゲル』誌が1848/49年革命の特集記事を編んだ。「共和国万歳」と題する記事には次のような前文を載せている。「ドイツ史の多くの闇の章の中で、ひとつ喜ばしい章がある。150年前、リベラルな市民たちが初めて民主主義的なナショナル国家のために戦ったのだ。1848/49年革命の挫折と共にドイツの悲劇も始まった」⁹⁾。この記事もL. ガルと共にフランクフルト国民議会におけるドイツ国憲法のドイツにおける歴史的意義をまずは評価する。すなわち、「ドイツ人は当時初めてヨーロッパの民主主義的運動の先端に位置していた。フランクフルトの議員たちによって決議されたドイツ国憲法は彼らの時代よりずっと進んでいた。すなわちそれは1919年ワイマール憲法と、さらには100年後ボンにおける議会に模範



フランクフルト・アム・マインでの記念展覧会カタログ『自由への出発』。
表紙の絵は国民議会の壇上に掲げられた「ゲルマーニア」

として役立った。(ボン)基本法のすべての章句はドイツ国憲法に基づいている」¹⁰⁾、と。

しかし同誌はドイツの歴史における明・暗二つの側面の指摘を忘れない。いわく、「では1848/49革命は一体チャンスがあったのだろうか。ドイツ人は1849年から1949年、いや1989年間の、彼らの歴史の薄暗い階段を飛び越すことができ、民主主義ヨーロッパへの直接の道を進むこともできたのだろうか。それとも反動家の勝利は第一次世界大戦へ、またアドルフ・ヒトラーの権力掌握へ向かわせたのだろうか。これらすべては、歴史家たちが150年の後もまだ格闘している問題なのである。そしてどうやっても答えははっきりしない」¹¹⁾。これに対して、すでに述べたように、L. ガルは「歴史の薄暗い階段を飛び越し」てみせた。それゆえ同誌はやや冷淡にガル指導の下でのフランクフルト記念展覧会に言及する。『1848年—自由への出発』、これはフランクフルト・シルム博物館で始められるマンモス展覧会のタイトルである。『フランスにとっての1789年がドイツにとっての1848年であった』、歴史家で展覧会指揮者のローター・ガルはこのように主張している。とすると1848年は、パウロ教会からワイマール共和国を経て直接連邦共和国へつながるドイツの自由の歴史の出発点だったのだろうか？。ドイツ人は『変わらぬ自由』のたゆまざる闘士だったのだろうか？」¹²⁾、と。

『シュピーゲル』はこの問いを直接L. ガルへぶつけた。同じ特集記事の中にガルへのインタヴューが掲載されている¹³⁾。「ガル教授、あなたはフランクフルト1848年革命150周年記念の展覧会に、『自由への出発』という楽観的なタイトルをおつけになりました。むしろ当時、ドイツの破局への方向が定められたのではないのでしょうか」。同誌のこの質問にガルは明快に答える。「いいえ、ドイツ史は第三帝国への一直線の道として見られるべきではありません。あのタイトルは1848年の運動の核は何であったのか、すべてにおいて対抗する諸力があながらも何が数十年を越えて作用し続けたのか、ということを狙ったものです。われわれの共同社会の本質的な要素、すなわち基本権の保証、議会主義、政治的行為の民主主義的な正当性、これらは1848年に帰因します」。『シュピーゲル』はさらに続けてガルに対する挑発的な質問を繰り出し、ガルはむしろ問題の所在をはっきりさせるために、より直截にフランクフルト記念展覧会の背後にある彼の1848/49年革命観を提起してみせる。同誌の繰り出す疑問の数々は、筆者自身も同様に抱いているものであるし、ガルの主張も浮き彫りにされているので、少し長くなるが、煩を厭わず訳出する。以下、次のような応答が続く――

Spiegel：しかし革命の挫折は、ヴィルヘルム二世の帝国へ、そしてその後のアドルフ・ヒトラーへ続く道のまさに始まりではなかったのでしょうか。

Gall：古い権力状況の再建は確かに不幸な結果を招く多くの展開に有利に働きました。しかし人間は単なる歴史の操り人形ではないのです。すべての世代は自分たち自身の責任を有し

ています。ほとんど不可避免的にビスマルクからヴィルヘルムⅡ世を経てヒトラーにつなげるドイツの特殊な道テーゼ、このテーゼからは歴史家たちは広汎な前線においてとっくに撤退しています。

Spiegel : 1848年後の年月の間に、デモクラシーへの現実的なチャンスがあったとでもおっしゃるのですか。

Gall : まったくそのとおりです。つまり頭の中には1848年の理念は生き生きと存在し続けていました。そして1850年代の終わりから、その主役たち、つまり自由主義者たちですが、彼らは再び意義と影響が大きく増大するのを経験しました……

Spiegel : ……1862年ビスマルクがプロイセン首相になるまでは、ですね。

Gall : そしてその後も、です。まさにビスマルクは一彼の出身身分の連中からするとショックなことに—自らの政治的地位を持ちこたえるために、1848年革命の多くの要求を移植しました。もっとも、ドイツ史の最も暗黒のページ、すなわち最終的には殺人的な反ユダヤ主義となる展開がそれですが、これは最初のドイツのデモクラシーの勝利の際に、はじめて開かれたというわけでは恐らくないと思われます。

Spiegel : 革命の間にも、反ユダヤ的な不埒なふるまいが、特に農村で生じましたが。

Gall : 私はそれを否定しようとは思いません。しかし、その核心において宗教的な刻印を帯び、何世紀もの間広く行き渡った偏見、それは広汎な大衆にとっては、多くのユダヤ人たちが金貸しであったことによってもその偏見が大きくなったのですが、この偏見と、急進的で、民族的・人種イデオロギー的な動機によるもので、最終的にはアウシュヴィッツへつながる反ユダヤ主義、この二つは区別しなければなりません。

Spiegel : 多くの48年（革命）人の大衆的ナショナリズム—多くの人々はバルト海から黒海までの一つの大ドイツ帝国を夢見ていましたが—このナショナリズムはヴィルヘルム時代の帝国主義の芽をすでに自らの中に持っていたのではないのでしょうか。

Gall : そのことは実際のところ1848年の暗い側面に属します。ところで、それを後にビスマルクが引き合いに出しています。彼はドイツ・ナショナリズムの調教師として、その他の諸勢力の前に立ったのです。

Spiegel : 連邦共和国はそれにもかかわらず1848年にさかのぼることができるかと？

Gall : そのとおりです。私は、ドイツ人のアイデンティティは、1848年に形作られた理念と秩序原理への信奉の中にあるはずだと思っています。それはすなわち、何よりも人間の権利とデモクラシーです。

Spiegel : それに民族（Nation）も、ではありませんか？

Gall : 民族の理念は、そう、二つの側面を持っています。一つは好戦的ですがすべての他の考えに

対して不寛容で拡張的なナショナリズムであり、もう一つは一つの社会の様々なグループを共同の理念のために集合させ、ある自由な共同社会への共同の意思形成プロセスにおいての諸グループを一つにする、そういうことを目的とするようなものでしょう。

Spiegel : 1848年3月の最初の不穏状態のあと、決起した者たちはすぐに撤退します。暴力的な転覆へのこの恐れはどこから生まれたのでしょうか。

Gall : 当時もちろん1789年のフランス革命の経過が人々の眼前にありました。すなわち暴力で全く新しい秩序を貫徹しようとし、そして結局はそれによって完全に挫折したジャコバンの恐怖支配がそれです。

Spiegel : 1848年の、むしろ平和的な革命の方がより成果があったかという、全くそうではなかったですが。

Gall : あなたは、その質問によって、人々がそうすることはなかった革命に対するある期待をすでにして仮定しています。ほとんどの市民は自由に選ばれた議会と憲法の助けによって、根本的な新秩序を作り出そうとしました。彼らは安定した状況を目指したのであって、終わらなき革命的状況を目指したわけではありません。

Spiegel : しかしまた、その議会の支援するためにドイツ人たちはまったく動員され得なかったではないですか。

Gall : そうは言い切れません。1848年春と夏、(精神的) 高揚は大きかった。国民議会と革命が離れていくのは、やっと1848年秋のことです。その時、ますます広汎な層の人々が革命的な不穏状態の結果によって、自分たちの物的生存が脅かされると思ったわけです。

Spiegel : 革命はそのような状況のもとでチャンスはあったのでしょうか。

Gall : 私はあったと思います。1848年3月、古い秩序の担い手たちはほとんど完全にたじろいでいた。そして夏においても、フランクフルトのパウロ教会(国民議会会場)で憲法について作業がなされている間、革命の側はまだ優勢を保っていた。状況がやっと反転するのは、オーストリアとプロイセンというドイツの二つの強国の指導層が立ち直り、自分たちの兵隊を再び集め、反攻、反革命へ身構えたときでした。

Spiegel : フリードリヒ・エンゲルスは議会の人々を非難して次のように言っています。「(彼らは) ドイツの民衆を夢中にさせるかわりに、退屈させてしまった」、と。代議員たちは憲法についてあまりにも長いこと討議しすぎて、大事な時を失ってしまったのではないですか。

Gall : いいえ。事実、ここで討議されていたことは、またたくうちに片づけることができたわけではありません。革命はまた民衆と議会の人々との間の相違によって挫折したわけではないのであり、むしろこの革命に敵対的に対立していた人々によって挫折したのです。

Spiegel : それはどのような人々ですか。

Gall : 特に貴族です。イギリスでは貴族は改革の用意ができておりましたし、そうであり続けました。ドイツではフランクフルト国民議会に多くの貴族も座っていたにもかかわらず、彼らの多数がそうではなかった。

Spiegel : しかしそのような改革の意志のある貴族も、若いビスマルクのような反動家に対抗することはできなかったのではないですか。

Gall : それはひょっとしたら決定的かもしれません。1848年とその後の数十年においても保守的貴族は硬直的に自分たちの特権に固執したのであり、それがドイツの発展を非常に阻害したのです。¹⁴⁾

1848/49年に日の目を見た自由主義の精神が、現在のドイツ連邦共和国へと脈々と伏流していた……。『シュピーゲル』誌が革命の敗北からビスマルク—ヴィルヘルム II 世—ヒトラーへと連なる歴史の系譜を提示するのに対して、L. ガルは、このように述べるのである。さらに革命中に存在した反ユダヤ主義に対しては、ガルは中世以来の伝統的反ユダヤ感情と、ヒトラーによる人種のイデオロギーを区別し、さらに『シュピーゲル』誌が革命期のナショナリズムを帝国主義期の拡大的ナショナリズムにつながる可能性を問うと、ガルは同じ手法で好戦的ナショナリズムと、共同体形成理念としてのいわば「平和的」ナショナリズムを区別してみせる。こうして1848/49年の反ユダヤ感情とナショナリズムは、後代との関連性が断ち切られるのである。そして最終的には、彼は革命敗北の究極の責任を改革意志のない貴族に求める。革命敗北の責任は自由主義者でもなく、民衆でもなく、貴族が負うとすれば、現在のドイツ人は心安らぐであろう。現代における自由主義の理念や、民衆あるいは市民の社会的意識と振る舞いが150周年によって問い返されることなく、今や絶滅してしまった貴族に責任ありというのだから。『シュピーゲル』はこのインタビューに「1848年の暗い側面」というタイトルを付けた。L. ガルはそのタイトルを見て苦虫をかみつぶしたことだろう。

しかしそれにしても、150年前の革命の明と暗を冷静に見きわめ、共に現代に生かそうとするバランス感覚はどこにいったのだろう。「1848年の明るい側面」を際立たせる意味はいったい何なのだろう。L. ガルが別の雑誌に書いた短文の中にわれわれはその真意を垣間見ることができる。雑誌『ダーマルス』特集号「1848/49年自由のための闘い」の中に彼は「革命の遺産」という短文を掲載した¹⁵⁾。そこで彼はベルリンの壁が破れて間もなく、旧東ドイツのドレスデンからフランクフルト・アム・マインのパウロ教会を訪れた1人の老人を登場させる。ガルによるとその老人は、フランクフルト国民議会の会場となったこの教会に展示してある1848年の「ドイツ国民の基本法」を読み上げ、涙を浮かべながら次のようにつぶやいたという。

「これらすべてがすでにずっと前に定式化されていたことを、われわれは生涯知らされなかった」、と。ガルは続けて次のように言う。「旧DDR市民の西ドイツ側の同伴者にとって、この老人自身以上に少なからず心を動かされる1990年の小さなドイツの風景である。彼は、どのように48年の大業がそのまま突然現代の中へ持ち込まれたかを目撃した証人であった。……彼の生涯は一般的な、今日では彼の中ではすでに歴史的なものとなった関連性に順応していた。1848年の目標と理想は、1989年、DDR支配を崩壊させた『平和革命』の間にも、デモの一連の要求の先頭に掲げられていた。そして似たようなことが、われわれを1848年から分かつ150年間、多くの状況に妥当する。『48年人』がまずは挫折したとしても、彼らの理想と諸要求はもちろんその時々の支配秩序との対立の中で、常に生き続けていた。それらは古い権力によってもはや取り除かれるようなものではなく、1848年との関連は後に常に追求され、樹立されてきた」¹⁶⁾。

ガルはこのエピソードをもう一度くりかえし、1848/49年革命の現代における意義を確認しようとする。いわく、「フランクフルト国民議会からちょうど100年目の1948/49年、成立しようとしていたドイツ連邦共和国のための『基本法』を審議し、決議する議会審議会の中では、それに対応して、基本権の問題が中心となり、特にまた、この基本権は将来いかなる国家的な手出しからも（いかなる理由があれ、またいかに多数決であれ常に）免れるという原則が中心となった。しかし基本権はさしあたってすべてのドイツ人に有効なわけではなかった。一部のドイツ人は1989年まで、さらに40年も待たねばならなかった。ドレスデンからの来訪者は壁の開放を見て、あまりに遅くはあったが、おそらくまたパウロ教会の勝利であると思っただろう。基本権の内実、その普及と完全化をめぐる対立はもちろん止むことはなかった。その対立は逆に近代の法治国家的に編成された社会の本質的要素であり、同時にまさにこの1848年の遺産の持続的現実性を際立たせている」¹⁷⁾。

彼の描き出すシナリオはこうだ。1848/49年革命が現代につながる核心は、かのフランクフルト国民議会が苦心の末に創り上げた「基本権」と「ドイツ国憲法」である。そしてこれらは100年後の1949年旧ドイツ連邦共和国の「基本法」に蘇った。この1848/49年革命を引き継ぐ基本法を、1989年ベルリンの壁崩壊後、今や旧東ドイツの市民も享受するに至った、と。ガルが登場させたドレスデンの一老人は、40年待ち続けた「自由」の福音に涙を流す。こうしてフランクフルト展覧会は1848/49年革命を1990年成立した新生ドイツ連邦共和国という「自由への出発」としてドイツ国民とりわけ旧東ドイツの人々の前に提示されることとなる。なぜか。

1989年ベルリンの壁が崩壊し、1990年ドイツは旧西ドイツによる旧東ドイツの併合としての新生ドイツ連邦共和国が成立した。統一ドイツの歩みが始まって10年を迎える現在、われわれはしかし東西の内的統一がいかに困難なものであるか、改めて認識する機会に何度か出くわし

ている。1998年9月27日東西のドイツ市民が共に行なった3度目の連邦議会選挙も、旧東独諸州の得票分布は旧西独諸州と際立った対照を見せた。旧東独の支配政党ドイツ社会主義統一党（SED）の後継党である民主社会党（PDS）が1994年選挙の得票率を下回るどころか再度得票率をさらに伸ばしたのである¹⁹⁾。これは旧東独諸州の市民が未だに統一後のドイツにおける社会的不満が減少しないことのひとつの表現であろう。1999年6月13日の欧州議会選挙でもその傾向は続いた。票を伸ばしたPDSは、例えば西ベルリン地区では3.5%に過ぎないのに対して、東ベルリン地区では40.9%を獲得している。『南ドイツ新聞』は、「選挙は首都がまだ分断されていることを再び示した」¹⁹⁾ という。事実、日常レベルでも、なお統一後の東西の齟齬を示す新聞記事が後を絶たない²⁰⁾。

1848/49年革命150周年記念事業はこのような時期に催された。ここに至って、L. ガルが学術指導を行なった、「自由への出発」というタイトルによるフランクフルト展覧会が、いやその他のドイツにおける数多くの催し物が何を意図していたのかについて、ある程度確かな推測ができる。すなわち再統一ドイツにおいて、未だ内的統一に至らない現実ゆえにこそ、旧西ドイツすなわち現ドイツ連邦共和国のシステムとその理念が、1848/49年革命の遺産を継承していることを、ドイツ全市民、とりわけ旧東独諸州の市民に示したかった、と。

2. 1848/49年革命150周年関連著書の三つの傾向

前節で述べたように、1997,1998年にはドイツにおいて1848/49年革命に関する数多くの出版物が公刊された。その中にはテオドル・ホイスの書の復刊²¹⁾ はまだしも、バーデン革命の劇画あり²²⁾、文化史の一端か革命期の料理本あり²³⁾ と、多岐に渡る。日本でも幾つかの出版物がこのテーマを取り扱った。ルイス・ネイミア／都築忠七・飯倉章訳『1848年革命－ヨーロッパ・ナショナリズムの幕開け－』（平凡社）、ヘルバート・シュタイナー／増谷英樹訳『1848年ウィーンのマルクス』（未来社）が翻訳書として公刊された。これらオリジナルは前者が1944年に、後者が1978年に出されたものである。新しく書かれたものでは、的場昭弘・高草木光一編『一八四八年革命の射程』（御茶の水書房）がある。筆者も加わったこの書はドイツにおける多くの書と同様、複数の著者による論文を編んだものであり、一人の著者によるものとは違って、一貫した視点に欠けることは否めない。もっとも同革命を「ヨーロッパ革命」として位置づけた上で、イギリス、フランス、イタリア、アメリカをも対象として、ドイツに限定されない広い視野から革命を概観しようという意図、あるいは革命期の民衆運動、カリカチュアを論ずるなど、新しい研究成果を取り入れようとする意欲は評価しうる。その他、雑誌では『情況』が『『共産党宣言』と革命の遺訓』というタイトルで別冊特集を編んでおり、『歴史評論』は昨

年末以来、「1848年革命150周年」シリーズを各号に組み込んでいる²⁹⁾。

ドイツの出版状況については、すでに増谷英樹氏が『歴史評論』1998年12月号所収の「150周年を迎えた1848/49年革命研究—ドイツの研究を中心に—」において紹介されており、ここで取り上げるテキストは増谷氏がすでに言及したものと重なるものもある。また氏の叙述からは多くの示唆を受けた。しかし本稿では特に1848/49年革命観ないし歴史的位置づけに的を絞って概観してみたい。

膨大な量の出版物のうち、入手しえたものを見る限り、三つの傾向が見られた。第一は、前章で述べたL. ガルと共有する革命観、すなわちワイマール憲法から1849年基本法につながり、1990年の統一後あまねく行き渡るに至った自由主義、民主主義の出発点としての1848/49年という視点である。第二は、ヨーロッパ革命の中のドイツ1848/49年革命という捉え方、第三は「大きな物語」を積極的に拒否して民衆世界の中における革命という社会史・文化史研究の成果を問うもの。この三点である。増谷氏もすでに第二の革命観（ヨーロッパ革命の中のドイツ革命）について言及し、さらに第三の傾向を「多様な革命」としての1848/49年革命観として特徴づけている。

まず第一の傾向について。ヴィルヘルム・リープヘッゲは『ネーションとしての議会、1848/49年のフランクフルト国民議会』²⁹⁾において、国民議会でのポーゼン問題、シュレスヴィヒ=ホルシュタイン問題で公然と主張されたナショナリズムに焦点を当て、しかし「フランクフルト国民議会の議員たちのあからさまなナショナリズムも、核心において戦闘的=攻撃的ではなく……、また第一次世界大戦におけるドイツの『世界政策』とは異なって、軍事的征服の方向を取らなかった。それはむしろ建設的なナショナリズムであろう」³⁰⁾と述べ、さらに国民議会が作成した「基本権」を「ヨーロッパの諸国民を包括するリベラルな政治文化の一部」³¹⁾と規定した上で、「フランクフルトで達成しようとしたのは、民主主義的なナショナル国家であった」³²⁾のであり、挫折はしたものの「二つの憲法の伝統、つまりフランクフルトとワイマールの伝統から、1949年の基本法と1990年のドイツ統一が生じたのである」³³⁾と結論づける。

さらにL. ガルに近い立場で三月前期における協会研究で知られたヴォルフガング・ハルトヴィッヒ編集の『1848/49年ドイツとヨーロッパの革命』³⁰⁾で彼は次のように1848/49年革命の今日的意義を表明する。すなわち「1989/90年、再統一したドイツの代議制的民主主義への最終的な移行によって、1848/49年革命のリベラル・デモクラティックな多数派の歴史上=政治上の評価は、肯定的な方へ向かった。革命は—その不成功にもかかわらず—今やドイツの議会主義的民主主義と参加型国民国家への道のりの本質的な一階梯と見なされている」³¹⁾というのである。もっとも彼の場合、「革命を今日の政治的秩序へすぐに一直線に整理することを許さない屈折を見て取らなければならない」³²⁾ことを指摘することは忘れていない。

このハルトヴィッヒ編の書は第二の視点としての「ヨーロッパ革命の中のドイツ1848/49年革命」という視座も含んでいる。増谷氏も取り上げた同書の中のハルトムート・ケルブレ論文がそれである。以前からドイツ＝フランスの比較史研究を行っていたケルブレ³⁹⁾は編者ハルトヴィッヒとともに、1848年の出来事を「ヨーロッパにおける多数の諸革命」ではなく、「一つの共通のヨーロッパ革命」と捉える。すなわち第一に1848年には革命ヨーロッパと革命の影響を受けなかったヨーロッパの二つがあったわけではなく、東・西・南ヨーロッパに影響を与えたという意味で一つのヨーロッパ革命であり、第二に、1848年のヨーロッパは革命の共通の原因、目標、担い手によって展開し、第三にフランス大革命に比べて、ヨーロッパ規模であり、ヨーロッパ・ナショナリズムが刻み込まれ、第四に現代のヨーロッパ統一の出発点であった、という。「ヨーロッパ統一と今日のヨーロッパの自己理解を基準点として選んだヨーロッパの歴史のために1848年の革命は意義がある」⁴⁰⁾。この言葉にケルブレの真意が表されている。いささか安直と感じられなくもないが、現在のヨーロッパ連合の中のドイツという視点から、1848/49年革命を見ようと方法論提示の一例である。

さらに、L. ガルと共に、ドイツの自由主義研究の第一人者ディーター・ランゲヴィーシェもドイツをヨーロッパ革命の中に組み込むことを提唱した。彼はハインツ＝ゲルハルト・ハウプトと共に編集した1295頁の膨大な『1848年ヨーロッパにおける革命、支配・社会秩序の変革、ナショナルな革命、影響』⁴¹⁾序文で、ヨーロッパ規模における1848年革命の意義を考察する。すなわち地方における封建的支配の廃止がそれである。この革命は敗北したものの、中期的には多くの影響をのちに残したと彼は言う。すなわち「社会的コミュニケーションの範囲を社会(階層的……筆者)・地域的に非常に拡大することに成功した。つまり新しい発展の水準に達したのである。その水準と革命後の時代は結びつくことができた」⁴²⁾のであり、さらに48年革命は「参加の権利と能力のある人々の範囲を促進し拡大した」⁴³⁾、あるいは「近代のナショナリズムの歴史において重要な階梯」⁴⁴⁾であると同時に「国内的なネーション形成のプロセスにおいても重要な一階梯であった」⁴⁵⁾という。

もっとも、彼によるヨーロッパ規模への視野の拡大は独特である。それは地方・地域研究と結びついている。すでに1995年リベラリズムの地域史研究の必要を唱えていた彼は⁴⁶⁾、昨年公刊された彼自身の編集によるもう一つの書『1847年から1849年までの民主主義運動と革命、国際的な視野とヨーロッパ的つながり』⁴⁷⁾の中で、ヨーロッパ革命としての1848年革命を、ナショナルな領域を一つの単位として相互比較するのではなく、地域・地方を比較上の単位として、それをヨーロッパ規模で比較すべし、というのである。すなわち「革命の全体プロセスを視野から失わない地方・地域研究」⁴⁸⁾が必要であり、ひいてはそれが「1848/49年のドイツ革命の連邦主義的基本構造を明確にする」⁴⁹⁾、と。こうして彼は、近年の社会史、文化史研究を組み

込むのである。なおこの書はオッフエンブルク市文化局企画のコロックウムを発端とするものである。1847年9月12日に大集会が開かれそこで自由主義的な13箇条の要求が発せられたオッフエンブルク市は、1997、1998年独自の記念事業を展開し、その他、二冊の書物『オッフエンブルク1802-1847年』および『オッフエンブルク1848/49年』を出している⁴⁴⁾。

1848/49年ドイツ革命をヨーロッパ革命の中に位置づけるのか、それともドイツというナショナルな枠組ではなく、ドイツの地域・地方の革命をヨーロッパ革命全体の中に比較単位として持ち込むのか、この二つの中にあるかなり重要な方法上の違いはさておき、いずれもヨーロッパの中のドイツを前提的な枠組として措定しているのが、1998年に出版された革命研究のもう一つの傾向であった。これは現代のヨーロッパ連合と、そこでの主要な一員として位置するドイツ連邦共和国という、現在のドイツのあり方を1848/49年革命に投影していること、われわれは容易に推測できる。だがそれは、ヨーロッパ連合の中でもはやドイツは特殊な歴史を背負っているのではない、「普通の国」であることの表明でもあろう。ではかの「ドイツの特殊な道」視座はどうなったのか。当然ながらここでもそれは捨てられ始めた。これについては次章で述べることとする。

1998年に出版された1848/49年革命研究の多くの書の中で、第三の特徴たる文化史・社会史の諸成果を見てみよう。増谷英樹氏が「多様な諸革命」としての1848/49年革命像と特徴づけて紹介したクリスティアン・ヤンセンとトマス・メルゲルの『1848/49年の諸革命、経験—加工—解釈』⁴⁵⁾がその一つであろう。「多様な諸革命」観とは、むしろ1848/49年革命をひとつの「像」として把握することそのものの積極的拒否である。この二人の編者による序文では、1848/49年革命は「一つの関連した事件としては解体され始め、そのかわりにそのときどきの環境の中で、様々な価値のランク Stellenwert を持った多数の出来事の複合体・知覚された諸形態・経験とその理解のあり方として把握され始めている。視線を大きな政治からそらし、参加した者たちの行為形式と知覚へ向ける限り、一つの大きな出来事というイメージは壊れやすいものになりはじめている」⁴⁶⁾という。彼らによれば、その代表的な例が「市民階級による市民革命」というイメージの解体であるという。そもそも「市民階級」なるものが同質的な社会グループとして存在しないことがはっきりしてきたからである、というのだ。

さらに彼らによれば革命研究の最近の視点は民族から地域へと向かい、「議会」、「ネーション」、「革命」という概念の背景として、「地方」での「社会的・文化的先行諸経験が様々な行動範囲と行動形式の中心的前提条件」になるという。こうして1848/49年革命は多数の出来事、経験、事件のための記号となり、従来の革命像は解体されることになる。ここで彼らが従来の古典的革命像として想定するのは、「ドイツの特殊な道テーゼ」である。このテーゼでは1848/49年をまずは新しい時代の始まりとして捉えた上で、その挫折から、ドイツの失敗の歴史が

始ったと捉えるテーゼ、「この特殊な道テーゼ」に対して彼らは1848/49年は「古い時代の終焉」であったと理解する。

もっとも1848/49年を新しい時代の始まりと捉えるか、それとも古い時代の終焉と捉えるかは、ある種、言い回しにすぎないように思われる。彼らとて、19世紀の後半には近代の出発があり、しかも近代の出発以後も、「革命と保守主義の諸理念による独特の混合物」が刻印され続けたというのだから⁴⁰⁾、それほど従来のドイツ史の解釈から逸脱しているわけではないのである。ただ、次のことは言える。彼らが1848/49年革命を新しい時代の始まりであるにもかかわらずそれに失敗した、と捉えるのではなく、「古い時代の終焉」と捉えるニュアンスの中には、1848/49年革命から、その後のドイツにおける「失敗の歴史」の初発責任を取り除いてやろうとする意識が見え隠れしているのではないかと。

もう一つ、クリストフ・ディッパーとウルリッヒ・シュベック編集の『1848年、ドイツにおける革命』⁴¹⁾も、地方史、文化史の研究成果を集積したものである。これは第一章「革命像。後代の1848/49年」でナチ時代や旧DDR時代など後代の革命像の変遷を探り、第二章「革命の嵐。事件の中心地」ではベルリンとウィーン以外にもバーデン、ザクセン、ケルンでの経過を追い、第三章「革命の空間」において革命の場としての街路、カフェー、市庁舎、議会について考察し、第四章「活動家と見物人。社会と革命」では社会各層および女性とユダヤ人につ



1997、98年に出版された1848/49年革命関連書籍

いて論じられた後、第五章「運動における支配。革命の政治」で特に革命の一つの中心課題である「ネーション」についていくつかの考察がなされる。論文集としては比較的まとまりを持ったこの書の執筆陣には、パウル・ノルテやミヒャエル・ヴェッテンゲル、ヴォルフラム・ズィーマンのような近年三月前期と1848/49年革命研究で斬新で顕著な成果を発表してきた研究者⁴⁹⁾と共に、上記『1848/49年の諸革命』編者トマス・メルゲルも加わっている。これら地方史、文化史研究に足場を置く二つの書のほとんどの執筆者はいずれも若い。

『1848年、ドイツにおける革命』執筆陣は、1940年代後半生まれが多く、例外は『1848年、ドイツにおける革命』の中で都市の下層民について書いているハルトムート・ツヴァーだけである。彼は旧DDR時代から1840年代労働者の社会的分解過程を実証的に研究してきた経歴を持ち、現在もライプツィヒ大学教授である。『1848/49年の諸革命』の方は1950年以降の生まればかりであり、最年長が1848/49年革命期の女性史、文化史の領域ですでに多くの成果を公けにしているカローラ・リップ（1950年生）である。中には1966年生まれの者もいる。

こうした若い世代の研究者にとって、冷戦時代に東を意識しつつ議会主義、民主主義の優位性を価値として歴史叙述の根底に持つ者、あるいはドイツの「特殊な道テゼ」を念頭に、ドイツのネガティブな過去と直面してきた「かつての若い世代」、さらには社会主義の遺産としての1848/49年革命を唱えた旧東独の研究者が持ちえた「大きな物語」はもはや意味を持たないのだろうか。その場合「大きな物語」の積極的放棄はいかなる「価値」に基づくのか。特に若い世代が革命における心性、地域的差異、女性、流行あるいは革命の場としての街路、広場、云々といった「小さな物語」へ関心を向け、そこに沈潜した場合、それらの研究は大きな19世紀あるいは20世紀まで連なる歴史の流れの中に、どのように連なる（kanalisieren）のだろうか。あるいは、農民、手工業職人、親方、下層民衆たちの運動は、様々なスペクトルへ拡散し、収斂することはないのだろうか。このような問いは、筆者のみのものではないだろう。

だが、それほど心配の必要はないかもしれない。例えば、すでに1980年代から1848/49年革命期の社会的プロテスト運動の研究を発表してきたマンフレート・ガイルスは、前掲『1848年、ドイツにおける革命』の中に、上記の疑問を挑発する格好のタイトル「街路」を書いている。彼は街頭における政治表現としての民衆暴動＝街路占拠（デモ、集会、祭）を革命期における最も重要な「メディア」と捉えた上で、それに次のような留保をつける。「様々なやり方の街路政治は確かに革命の本質的な構成要素であった。しかし疑いなく、革命は、街路政治の成果の中に現れるわけではなかった」⁵⁰⁾。ではいかなる場合に街路政治は有効性を持ちうるか。そのときガイルスは「協会」、「政治集会」に注目する。いわく、「地域の街路政治の地平がナショナルな政治のテーマへ広がるのは、普通以下のようなところでのみ、行なわれた。すなわち、発展しかつ革命を支えている協会組織――特に民主主義クラブや労働者協会――を伴った都市

の状況が存在しているような場所でのみ行なわれたのである。この前提の下で、ナショナルな広がり *Ausstrahlung* を伴った行動が展開された⁵⁰⁾、あるいは「様々なやり方の街路政治は確かに革命の本質的な構成要素であった。しかし疑いなく、革命は、街路政治の成果の中に現れるわけではなかった。爆発的に表現される要求は、協会や議会といった制度化された革命の方向への移行が必要であった。ここに革命の中心問題がある⁵¹⁾」というのである。

確かに三月前期から革命期にまで続いた民衆によるパン暴動、食糧暴動はそれ自体としては中世以来のシャリバリの性格を持つものであり、それは祭の要素あるいは共同体の秩序維持の要素すら持ちうる。しかしドイツの場合、1830年、1847年の食糧暴動はそれが社会改革の運動へと転換されるダイナミズムを持っており、ガイルスによれば、その二つの流れの「運河」となるのが「協会」、「民衆集会」であるというのである。筆者もまた「協会」運動が三月前期および1848/49年革命に果たした意味の重要性を強調する立場から⁵²⁾、このガイルスの考察に大いに注目したい。

さらに従来、女性史の立場から「大きな物語」を男性による歴史叙述として、これを拒否し、1848/49年革命における女性を主役とする社会史研究を行なってきたカローラ・リップ⁵³⁾ は、ヤンセン/メルゲル編の『1848/49年の諸革命』の中に「行動主義と政治的禁欲」なる一文を寄せている。副題は「自治体政治の経験と生活世界の構造が1848/49年革命における政治的参加へ及ぼす影響」である。彼女はこの中で「政治的文化とは、政治的システムのマイクロとマクロのレベルの間の媒介的・行為理論的基礎原則であると考えられているにもかかわらず、政治的行為は、これまでの研究ではほとんど生活世界の関連性から孤立しているように見える⁵⁴⁾」と述べ、エスリンゲンという一地域を対象として、革命におけるマイクロとマクロの世界の媒介エレメントとして、その意義に限定はつけるものの、政治的・文化的「協会」の考察を行なっている。ガイルスやリップの場合、個別領域のマイクロ研究からつながるべき公共性の世界とは、広がりをもった社会的プロテスト運動、別言すればネットワーク型の市民イニシアティブということになると思われる。

その他、地方諸都市、とりわけ南西ドイツの諸都市が、すでに紹介したオッフエンブルクに限らず、当該都市の1848/49年革命に関する書を公刊しており、その数は膨大なものになる⁵⁵⁾。

以上、1848/49年革命150周年を記念して公刊された著書の傾向を三つに分けていくつか紹介してきた。その傾向とは、第一に1848/49年革命を自由・参加型民主主義・議会主義という理念とシステムの出発点として捉え、それはドイツ史の伏流となって現在の連邦共和国の体制に実現されたというもの、第二に1848/49年革命をヨーロッパ革命の一環として捉えるというもの。その場合、ナショナルな枠組ではなく、地域・地方を革命の「場」として捉える。第三

に「大きな物語」を拒否しつつ、地域・地方に視線を向けた社会史・文化史的方法による1848／49年革命像、ということになる。

ところで、これら三つの傾向を貫く一本の線がある。第一章での長々と引用した『シュピーゲル』誌によるL. ガルへのインタビューを想起していただきたい。ガルは言う、「ビスマルクからヴィルヘルム世を経てヒトラーにつなげるドイツの特殊な道テーゼ、このテーゼからは歴史家たちは広汎な前線においてとっくに撤退しています」、と。一本の線とはまさに、この「ドイツの特殊な道」テーゼからの撤退、これである⁵⁹⁾。ではそれはどのように進行しているのか。

3. 「ドイツの特殊な道」テーゼからの撤退？

L. ガルは「ドイツの特殊な道」テーゼから歴史家たちはすでに撤退していると述べた。確かに筆者の見るところ、1848／49年革命150周年を機にそれがはっきりとした形姿で浮かび上がってきた。それも非常に分かりやすい筋道で。

ドイツの歴史学における主要な方法論的視座として存在していた「ドイツの特殊な道」テーゼは1980年アメリカのD・P・カレオ、イギリス人の若手研究者D・ブラックバーンとG・イリーによって痛烈な批判を浴びた。後者については、いちはやく1983年、望田幸男氏によって翻訳・解説され⁶⁰⁾、1985年松本彰氏による論争の紹介⁶¹⁾がされており、立ち入って論じる必要はないと思われるので簡単に触れるにとどめる。

「ドイツの特殊な道」テーゼとは、1848／49年革命の挫折以来、ドイツ・ブルジョアジーがブルジョア革命を完遂することを放棄し、以後、自由主義的・民主主義的な体制変革は中途半端なまま推移した結果、第二帝政期には権威主義的なシステムや様々な後進的要素を孕んだまま20世紀に突入し、ついにはナチズムを生み出すに至ったとする歴史分析の方法である。あるいは逆にナチズムを生み出すことになった要因をドイツ史の中に遡って1848／49年に至る方法とも言えよう。これに対して、まずイリーは、そもそもブルジョアジーが自由主義的であり、民主主義的であるということ自体が幻想であり、「特殊な道」テーゼを奉じるドイツの歴史家たちが「模範」とするイギリス、フランスのブルジョアジーが民主主義的改革には抑圧的であったのを見てもそれははっきりしているという。仮にブルジョア革命を「産業資本主義の展開を妨げないような法制的・政治的体制創出」と捉えるなら、19世紀後半のドイツも立派にブルジョア革命を成し遂げているということになる⁶²⁾。一方、ブラックバーンは19世紀後半のドイツが近代化の道を歩んでいたのだということを強調する。すなわち鉄道・電信・新聞による全国的コミュニケーション網の設立を基礎とする、法の前の自由、集会を催し参加する権利の拡大

(法的確定)、請願権、団体を結成し公的討論に国民的に参加する諸権利一般の実現と、それによる市民的「公共性」の発展である。彼はこうして、「ドイツ・ブルジョアジーの封建化についてよりも、むしろドイツ社会のブルジョア化について論じる」⁶¹⁾のである。

これに対して、1981年ハンス＝ウーリヒ・ヴェーラーが、1982年にはユルゲン・コッカが反論を加えた⁶²⁾。個々の論点はさておき、結論的にはヴェーラーは「ナチズムについて語る場合、前工業的な伝統、市民性の不足、市民階級の議会主義的＝政治的力の不足について語ろうとしない者は、黙るべきである」⁶³⁾と一喝し、コッカは「彼らは現代の特殊な道論争の核心問題と原点の問題をテーマとしていない。その問題とは、何故ドイツが唯一の高度に発展した工業国としてファシズム化したのかという問題である」⁶⁴⁾と述べ、いずれも「特殊な道」テーゼの根底に、ナチズムへ至る自己の歴史を切開するドイツ人自身の歴史的価値判断が通底していることをイリーやブラックバーンらは理解していない、というのである。彼らの言うとおりに、「特殊な道」テーゼの核心はここにある。

しかし、ドイツ人自身からではなく、とりわけ外国の研究者から、ドイツの特殊性に拘泥する必要はない、ドイツも他の西欧諸国とそれほど違わない、という声が上がったとき、それは歴史的重荷を背負ったドイツ人にとって、ひそかに肩の軽くなる気持ちにならなかったろうか。

1848/49年革命150年記念の議論に立ち戻ろう。第2章で指摘した1848/49年革命観の三つの傾向のうち、第一の傾向は、1848/49年革命を「自由への出発」と捉え、自由主義・立憲主義・代議制的民主主義獲得の努力が、幾多の試練を経て、ワイマール共和国に、第二次大戦後の旧連邦共和国に、そして今や統一ドイツに実現された、という見方であった。この場合、1848/49年を出発点とするドイツの歴史は、西欧とは違った特殊性を纏ったものであってはならないことになる。L. ガルが『シュピーゲル』に答えて次のように言うとき、ドイツの「特殊な道」はもはやありえない。「私は、ドイツ人のアイデンティティは、1848年に形作られた理念と秩序原理への信奉の中にあるはずだと思っています。それはすなわち、何よりも人間の権利とデモクラシーです」⁶⁵⁾。

1848/49年革命観の第二の傾向、すなわち「ヨーロッパ革命の中のドイツ」という視点にとって、「ドイツの特殊な道」はどのような意味があるのか。『1848年ヨーロッパにおけるドイツ』の編者の一人ディーター・ランゲヴィーシェは、この書の中で「特殊な道」テーゼに触れている。彼によれば、ドイツの歴史に批判的な問いを投げかけた「ドイツの特殊な道」についての議論の「業績は確かに残る。もっとも仮にそのうちに人が『ドイツの特殊な道』という説明基準の古い形式から離れたとしても、ということである」。こう述べた後、この「説明基準の古い形式」を批判する。すなわち「このやり方では基本的に二つのフィクションが比較されている。すなわち近代ドイツ史の基本的な道がヨーロッパにおける特殊な道という特殊性に選

元されうるようなフィクション、さらにはっきりとした統一的な西欧の対抗モデルのフィクションである」⁶⁶⁾ というのである。彼自身の編集によるもう一つの書『1847年から1849年までの民主主義運動と革命、国際的な視野とヨーロッパ的つながり』⁶⁷⁾ の中でも、彼は地方史・地域史重視の立場からドイツの「特殊な道」史観を批判している。いわく「ナショナルな歴史をいくつかのひとかたまりの全体Gesamteinheiten、より正確には説明の諸単位Deutungsblöckeとして対照させる研究がはっきりと支配的である。『ドイツの特殊な道』という意味モデルが一つの傑出した例である。そこでは48年革命は傑出した位置を占めている。ドイツ、この革命のなかった地、いずれにせよ革命に成功しなかった地。これがトボスである。ナショナルな比較はここでは次のことを意味する。すなわちドイツの歴史と西側諸国の歴史がーというのもほとんどまったく西欧と比較されるー比較できるある程度圧縮された歴史を得るために一つの説明の核へと還元される」。この二つのフィクションとしてのドイツと西欧モデルに立脚した「ドイツの特殊な道」モデルの「目の粗い形式から人は決別した」というのである⁶⁸⁾。

ヨーロッパ革命としての1848年革命を、ナショナルな領域を一つの単位として相互比較するのではなく、地域・地方を比較の単位として、それをヨーロッパ規模で比較すべし、という彼の立場からして、ナショナルな単位、国家という単位での比較方法を取り、しかもドイツも西欧もフィクションのモデルであるような「特殊な道」史観は受け入れがたいということになる。なおランゲヴィーシェの場合、地域・地方から直接ヨーロッパに視野を広げるだけではないことも付言しておく。彼は、19世紀前半の地域・地方研究をナショナルな視野から統合しようとする、そこから浮かび上がるのは、ドイツ史の「連邦主義的」特徴である、ともいうのであり、この意味におけるナショナルな視点が欠如しているわけではない。

こうして地方・地域史に比較の基礎を置くヨーロッパ革命におけるドイツ1848/49年革命という見方は、ドイツをヨーロッパ規模の同じ歴史現象の一環として捉える限りにおいて、何ら特殊なものではなくなる。これは現代のヨーロッパ連合の中のドイツ、という現状を起点とするものであること、疑いえない。ここでもまた「特殊な道」テーゼからの撤退が1848/49年革命観の第一の傾向と同じく、行なわれているのである。

次に1848/49年革命観の第三の傾向はどうか。そもそもこの傾向に属する若い世代の論者たちは1848/49年革命を単数ではなく、「諸革命」すなわち「多様な革命」として捉えることからして、一つの革命観を提起する意図そのものが希薄である。しかし社会史、文化史あるいは地方史、個人史に立脚して多様な諸革命像を提起するこの傾向においても、この革命を近代の起点であると捉える点では、ある程度共通している。それゆえ、1848/49年革命を挫折した革命と規定する「特殊な道」史観とは対立せざるをえない。前章で紹介したC・ヤンセン、T・メルゲルは『1848/48年の諸革命』の中で次のように言う。「革命は挫折した。これが説明の

筋道の成果であった。そこでは1848/49年はドイツの失敗の歴史のはじまりになる。すなわちドイツの特殊な道テーゼの出発点として。これに対して、新しい研究は行為形式や、その背後にある価値、知覚様式を問題にする。新しい研究は言語行動、共同性形成を研究し、別の帰結に至る。すなわち1848/49年は新しい時代の始まりというよりも、むしろ古い時代の終焉であった、と⁷⁶⁾。そしてこの革命後に「近代性の出発は明らかにむしろ三月後に見られる⁷⁷⁾」というのである。しかし古い時代の終焉と近代性の出発の間に長期の過渡期を想定していない以上、これはメダルの表裏の関係にある。そうだとすれば、1848/49年から近代が始まったと言ってもよいであろう。そう言わないのは、1848/49年が「ドイツの失敗の歴史の始まり」ではないと彼らは考えるからである。すなわち「失敗の歴史の始まり」ではないが、「近代の始まり」である、というわけだ。それゆえ革命の挫折から始まるドイツ近代の歪みを検出しようとする「特殊な道」テーゼは、彼らにとって受け入れがたいものとなる。

このような推論は決して牽強付会ではない。この第三の傾向に指針を与えているのはヴォルムラム・ズィーマンではないかと思われる。前章で取り上げたC. ディッパーとU. シュベックの『1848年、ドイツにおける革命』の執筆陣にも加わって革命期のコミュニケーション形式の発展を論じている彼は、すでに1985年『1848/49年のドイツ革命⁷⁸⁾』を著している。1998年には英訳も出たコンパクトなこの書は、ズィーマンの単著である。これまで紹介した多くの書は、いずれも多くの執筆者たちによる論文集であり、一定の編集方針はあっても、一貫した叙述形式にはなり難い。その点、ズィーマンの一つのまとまりを持ったこの書は、革命直前の社会階層の分類、革命期の民衆運動や協会運動やコミュニケーションの拡大による公共性（世論）の形成など近年の社会史研究の成果を取り入れた新しい1848/49年革命研究の地平を開くものである。この書の意義は幾重にも評価してよい。

しかし、この書の一貫した問題意識は、なによりも1848/49年を「引き返すことのできない今日まで続いている近代化過程の一環として理解⁷⁹⁾」するところであり、そうであるがゆえに、彼は「革命の挫折」を論じることには与しない。彼は言う。「1848/49年革命に対する記述は『挫折』について考えて終わるのが常である。それは一元的な目的追求を仮定している。それは革命のダイナミズムに対する観察が示したように、疑わしいものになっている⁸⁰⁾、と。

1990年、ズィーマンは1848/49年革命に続く時代を扱った『1849-1871年、曙の中のドイツ社会⁸¹⁾』を著し、この革命後から第二帝政創設までの時期、リベラリズムが社会の広範な部分の近代化を実現したことを明らかにしようとした。それゆえ「特殊な道」テーゼがリベラリズムの権威主義的国家への屈服を見るとすれば、この時期については彼はそのテーゼを留保せざるをえない。しかり、彼は「1866年から1871年の間の大きな転換は、収支計算的に問えば、ドイツの特殊な道の始まりなのであろうか？」⁸²⁾という問いを立てた後、これに否定的に答える。

「基本的に、いったい『ノーマルな道』とは何かを定義することが、大きな困難なのであり、「貴族の一部と教養・所有市民層の広範な領域との間の妥協は英国でも、フランスでもイタリアでも同様に特徴的なことだった」⁷⁶⁾。こうして1848/49年とそれに続く1871年までのドイツ・リベラリズムが特殊な道を行んだのではないことを、彼は明らかにしようとするのである。ドイツにおける特殊性を相対化し、市民的公共性の展開を軸に19世紀ドイツ近代の不可避的歩みを検証しようとするズィーマンの方法は、あたかもブラックバーンの立論を受け入れ、それを証明しようとするかのようである。

このズィーマンの立論を前提にしてもう一度G. ヤンセン/T. メルゲルに立ち戻ってみよう。彼らは言う、「確かに革命は、国家形式と決定機関の実効ある改造という意味において、短期的な政治的成果には恵まれなかった。しかし革命は政治的行為、社会的な地理学、人間の集団的メンタリテートにおける長期的な変化を解き放ち、新しい期待を創出するような諸経験を生み出した」⁷⁷⁾、と。この視点は明らかにズィーマンのそれと重なる。

1848/49年革命150周年を記念する膨大な著作は、それぞれ現代ドイツの現状認識を見事に反映していた。第一の傾向は、1848/49年革命の挫折から続くドイツにおける民主主義化の遅れという「特殊な道」史観を捨て、革命の挫折を論じるのではなく、そこから始まる自由主義の思想・制度的確立への努力の連続性に視点を定めた。この連続性は、伏流となってワイマール憲法の中に一度姿を現し、さらに旧連邦共和国において確立され、今や統一ドイツに至ってあまねくドイツ人が共有する確たるものへと実現されたという。すなわちそれは憲法であり、議会主義であり、参加型民主主義である。「あまねく」とは、新諸州(=旧東独諸州)の人々をも含むという意味、いやそれ以上に、むしろとりわけ新諸州の人々を意味するのであり、彼らにこそ、1848/49年の自由主義の努力を継承した現体制の歴史的正当性がアピールされたのではなかったか。

第二の傾向は、ドイツにおける1848/49年革命を、ヨーロッパ1848年革命のうねりの中に位置づけ、比較を行うのだが、その比較の単位はナショナルなレベルではなく、地域・地方のレベルにおける比較である。この場合、イギリス、フランスを「西欧」モデルとして比較の基準にした上で、ドイツの「特殊性」を照らしだそうとする「特殊な道」史観を捨てる。なぜなら今や統一ドイツは何ら「特殊」ではなく、ヨーロッパ連合の中核を占める国、いやこの超国家的連合体としてのヨーロッパ連合の中核的「地域」なのだから。こうしてヨーロッパの中のドイツは、近隣諸国と同じ歴史的経験を持つ一員としてヨーロッパ人に自らをアピールするのである。

第三の傾向は、地域史・地方史、社会史、文化史あるいは女性史の研究成果を踏まえ、その

上で1848/49年革命を「近代の出発点」と理解する。「近代の出発点」と理解する限りにおいては、第一の傾向と一見重なるが、第一の傾向がフランクフルト国民議会における基本権および憲法を重視するのに対し、むしろ下からの民衆運動とそれを起点とする公共性形成の近代的形式の芽生えに、より関心を向ける点異なる。もっとも、やもするとミクロの分析に沈潜し、歴史の流れの中に1848/49年の出来事を位置づけることへの関心が希薄になる場合もある。この第三の傾向も、1848/49年を「近代の出発」と捉える点で、あるいは「大きな物語」を拒否する点で、「特殊な道」テーゼから撤退しようとしている。

本来、ドイツの「特殊な道」テーゼは、ドイツがナチズムへなぜ突き進んだのか、何よりもこれを問うものであった。それはドイツ人による自らの歴史の切開であると同時に、現在にあっても民主主義を損なう要素が頭をもたげてくれば、それを歴史的な反省をもとに批判するための、一つの価値判断である。自由・民主主義・不可侵の基本的人権を、連邦大統領ローマン・ヘルツォーク、L. ガルと共に謳い上げること、それだけをとってみれば筆者も何ら異議はない。だが、1848/49年革命の「明暗両面」を見ることなくそれを無原則に称揚し、それ以降の歴史に宿る「暗い側面」を日々反芻することなく、同革命と現在のシステムにおける自由・民主主義・不可侵の基本的人権なるもの一直線につなげることは、むしろそれらが日々静かに危機に晒され続けていることに鈍感になりはしないか。それは恐らくは、そして願わくば、ヘルツォーク、ガルの望むところでもないだろう。

はたしてドイツの「特殊な道」は終わったのか。ハインリヒ・アウグスト・ヴィンクラーは『ドイツ史の論争問題』の第7章「特殊な道（複数……筆者）からの決別、再統一前と後のドイツ人」（Abschied von den Sonderwegen, Die Deutschen vor und nach Wiedervereinigung）において、特に統一後に歩むべきドイツの道について考察している。その場合、彼は従来の主張である分断下の旧連邦共和国を西側と結びついたポストナショナルな国家と規定した上で、統一後のドイツをポスト古典的ナショナル国家と呼ぶ。統一によって確かにドイツはナショナル国家になったが、「原子力・生物・化学兵器の所有のような国家主権のいくつかの可能な特性」の放棄、「戦闘力の量的な制限」、「ヨーロッパ連合とNATOのような超ナショナルな結合に堅く結びついている」ことによって、古典的ナショナル国家ならぬポスト古典的ナショナル国家になったというのである⁷⁶⁾。彼によれば東西分断下のドイツは東西共に「特殊な道」を歩んでいた。それが「1990年10月3日の新しい“ポスト古典的”ドイツ・ナショナル国家形成とともに、二つの特殊な道は終わりをつけた」⁷⁷⁾のである。さかのぼって、第二次大戦以前の「特殊な道」は1945年に終わったのであるから、今や「全てのドイツの特殊な道、ドイツ帝国の反西側という特殊な道、旧連邦共和国のポストナショナルという特殊な道、DDRのインターナショナルという特殊な道、これら全ての特殊な道の終焉ののち、全ドイツはやっと一つの民

主義的な西側へ堅くインテグレートされたナショナル国家⁸⁰⁾になった。

ヴィンクラーによると、こうして「特殊」でなくなったドイツは「国連のメンバーとして軍事領域においても、旧連邦共和国が背負わされていた以上に責任を引き受けなければならない」し、「国内的な諸問題のために建設的な解決」を見いださなければならないのであり、現下の戦後最も深刻なリセッションの時代にあって、再統一後、第二のドイツのデモクラシーが試練に直面している、というのである。

もう一度問う。ドイツの「特殊な道」は終わったのか。「ドイツの特殊な道はない」、これは昨年10月、総選挙によって勝利した社会民主党／緑の党連立政権の外務大臣になった緑の党のヨシュカ・フィッシャーの言葉でもある。これを受け、「(ドイツ) 軍の犯罪が行なわれたところでさえも、犯罪を阻止することが課題なのであれば、民主主義ドイツは手をこまねていることは許されない⁸¹⁾」、と表明するのは社会民主党員である現首相ゲルハルト・シュレーダーであった。ここでの「特殊な道」とは、ナチズムへつながっていたかつての道ではなく、現在から将来へ続く道である。しかし「特殊な」ドイツを否定して、こうして同盟国の信頼の置けるパートナーとして「普通の国」を宣言する現政権トップの言葉と、「特殊な道」史観を捨て現行システムの賛美とヨーロッパの中のドイツを強調する1848／49年革命150周年記念の声が共鳴しているのを聞き取ることができはしないか。

本稿を書き終えた1999年6月末日、ドイツ軍はNATO主体の国際部隊の一員として8,500名の部隊がコソボへ駐留している。

論文注

- 1) 増谷秀樹「150周年を迎えた1848／49年革命研究」、『歴史評論』No.584,1998年12月号、校倉書房、87頁。
- 2) Badisches Landesmuseum "1848／49. Revolution der deutschen Demokraten in Baden", (Hrsg.), Klinkhardt & Biermann, 1998.
- 3) "Nachrichten für Historiker", http://www.crispinus.com/nfh2/1848/1848_veranstaltungen.htm
- 4) "Spiegel", Nr.7, 02.Feb., S.46.
- 5) "Frankfurter Allgemeine", 19.Mai 1998.
- 6) Lothar Gall(Hrsg.) "1848, Aufbruch zur Freiheit, Eine Ausstellung des Deutschen Historischen Museums und der Schirn Kunsthalle Frankfurt zum 150jährigen Jubiläum der Revolution von 1848／49", S.16.
- 7) ebenda.,S.23.
- 8) Harald Siebenmorgen, "Vorwort", in, "1848／49. Revolution der deutschen Demokraten in Baden", S.11
- 9) "Spiegel", Nr.7, 02.Feb., S.44.

- 10) ebenda., S.45
 11) ebenda., S.45-46.
 12) ebenda., S.46.
 13) これについては的場昭弘氏、増谷英樹氏も簡単に触れている。的場昭弘・高草木光一編『一八四八年革命の射程』viiページ、増谷秀樹「150周年を迎えた1848/49年革命研究」、『歴史評論』No.584、1998年12月号、97ページ参照。
 14) "Spiegel", S.54-55
 15) "Damals Spezial,1848/49 Für Die Freiheit Streiten"., DVA, Stuttgart,1998. SS..106-111
 16) ebenda., S.106
 17) ebenda., S.108
 18) ドイツ総選挙の結果
 カッコ内は1994年の結果。CDU(CSU)=キリスト教民主(社会)同盟、SPD=社会民主党、B.90/GRÜN=90年連合/緑の党、FDP=自由民主党、PDS=民主社会党、Republikaner=共和党、DVU=ドイツ人民連合

	CDU(CSU)	SPD	B.90/GRUEN	FDP	PDS	Republikaner	DVU
全 国	35.2(41.4)	40.9(36.4)	6.7(7.3)	6.2(6.9)	5.1(4.4)		
シュレスヴィヒ=ホルシュタイン	35.7(41.5)	45.4(39.6)	6.5(8.3)	7.6(7.4)	1.5(1.1)	0.4(1.0)	1.3
ハンブルク	34.9(34.9)	45.8(39.7)	10.7(12.6)	6.4(7.2)	2.3(2.2)	0.6(1.7)	0.6
ニーダーザクセン	34.1(41.3)	49.4(40.6)	5.9(7.1)	6.4(7.7)	1.0(1.0)	0.9(1.2)	0.6
ブレーメン	25.4(30.2)	50.2(45.5)	11.2(11.1)	5.9(7.2)	2.4(2.7)	0.6(1.7)	1.6
ノルトライン=ヴェストファーレン	38.0(38.0)	43.1(43.1)	6.9(7.4)	7.3(7.6)	1.2(1.0)	1.0(1.3)	0.9
ヘッセン	34.7(40.7)	41.6(37.2)	8.2(9.3)	7.8(8.1)	1.5(1.1)	2.3(2.4)	1.0
ラインラント=プファルツ	39.1(43.8)	41.3(39.4)	6.1(6.2)	7.1(6.9)	1.0(0.6)	2.1(1.9)	0.7
バーデン=ヴュルテムベルク	37.8(43.3)	35.6(30.7)	9.2(9.6)	8.8(9.9)	1.0(0.8)	4.0(3.4)	0.6
バイエルン	47.7(51.2) (CSU)	34.4(29.6)	5.9(6.3)	5.1(6.4)	0.7(0.5)	2.6(2.8)	0.6
ザールラント	31.8(37.2)	52.4(48.8)	5.5(5.8)	4.7(4.3)	1.0(0.7)	1.2(1.6)	0.9
ベルリン	23.7(31.4)	37.8(34.0)	11.3(10.2)	4.9(5.2)	13.5(14.8)	2.4(1.9)	2.4
メクレンブルク=	29.3(38.5)	35.4(28.8)	2.9(3.6)	2.2(3.4)	23.6(23.6)	0.6(1.2)	2.7
ブランデンブルク	20.8(28.1)	43.5(45.1)	3.6(2.9)	2.2(2.6)	20.3(19.3)	1.7(1.1)	2.7
ザクセン=アンハルト	27.2(38.8)	38.1(33.4)	3.3(3.6)	4.1(4.1)	20.7(18.0)	0.6(1.0)	3.2
チューリンゲン	28.9(42.5)	34.5(29.6)	3.9(4.5)	3.4(3.2)	21.2(16.6)	1.6(1.3)	2.9
ザクセン	32.7(48.0)	29.1(24.3)	4.4(4.8)	3.6(3.8)	20.0(16.7)	1.9(1.4)	2.6

※"Frankfurter Allgemeine Zeitung", Nr.226. 29. Sep. より作成。旧東独諸州のPDSの得票率分布と旧西独諸州のそのの落差に注意。

- 19) "Süddeutsche Zeitung", 15.Juni 1999.
 20) 1999年3月9日の『南ドイツ新聞』に次のような記事が出た。要約するところである。ハノーバーの犯罪研究所長アルターク・クリスティアン・プファイファーなる人物が、旧東独諸州の若者に多いの暴力性や外国人敵視の原因は、若者の高失業率や将来への展望の無さといった外的要因に求められるの

ではなく、旧東ドイツの保育園、ギムナジウム時代の教育の結果であると主張した。すなわち個人性の抑圧、同歩調の思考、同歩調の行進、訓練、秩序……といった教育システムが統一後崩壊し、アイデンティティを喪失した若者たちが徒党を組むのである、とプファイファーは言う。これに対して旧東独諸州の人々から「差別」、「植民地の住民のように扱われている」といった猛烈的な抗議があり、プファイファーに対しても「何も知らない良きヴェッシー（西の連中）」との非難もあった。これに対してプファイファーは「私も両親と共に1952年東から西へ逃れてきた者だ」と答えた。つまり旧東ドイツの内実をよく知っているというわけである。記事のタイトルは「Provokierendes vom Halb-Ossi」（半オッシーの挑発）。驚くべきは、プファイファーなる人物の「犯罪学なるもの」それ自体ではなく、このような西＝東の不調和を典型的に表しているような記事が統一後10年もたとうとしているドイツの日常の中に散見されることである。西＝東の内実的な統一がいかに困難であるかを示す一例と言えよう。このような西＝東の不調和を露呈する類の記事は特別なものではなく、いくらでも見つけ出すことができる。なお、拙稿「DDRノスタルジー？、ードイツ統一5年後・ユルゲン＝コッカの時論を巡ってー」（『専修経済学論集』第30巻第2号、1995年）、加藤浩平「旧東ドイツ経済と『メッツォジョルノ問題』ー地域経済格差とその収斂ー」（同第33巻第1号、1998年）参照。

- 21) Theodor Heuss, "1848, Die gescheiterte Revolution", Deutsche Verlag-Anstalt, Stuttgart, Neu-ausgabe, 1998. これにはR. v. ヴァイツェッカー前大統領の序文が新たに加えられている。ヴァイツェッカーも、革命は失敗したが、「それでもなお、1848年以後は、もはや以前と同じではなかった。それは偉大で、実り豊かな遺産を残した。」(S.2) と述べて、現在に直接つないでいる。
- 22) Joseph Béhé, Frederipeue Schwebel, Patrick Noël, Roland Peter, Klaus Mühlsteffen, Michael F. Walz, "Des Vlokes Freiheit, Die Revolution von 184/49 in Baden und Württemberg", Ehapa Verlag, Stuttgart, 1998. ところで、当時のカリカチュアを扱ったものに、マンハイムのライス・ミュージアムの展覧会パンフレット"Mit Zorn und Eifer, Karikaturen aus der Revolution 1848/49", Klinkhardt & Biermann, 1998. あるいは、Günter Junge, "Vormärz und Revolution 1848/49, Wilhelm Storck, Porträt- und Historienmaler, Politischer, Karikaturist, sein Leben und Werk", K.O.Storck Verlag, 1998.
- 23) Christel Seidensticker/ Gertrud Loebell, "Kochbuch zur Badischen Revolution", Verlag Moritz Schauenburg, Schauenburg, 1998.
- 24) 『歴史評論』1998年12月号には、本文に掲げた増谷論文、その他、割田聖史「フランクフルト国民議会における『ポーランド問題』」、『歴史評論』1999年2月号、No.586、山根徹也「1847年プロイセンにおける食料騒擾と市場規制（上）」、『同』1999年4月号、No.588、「同（下）」、『同』1999年5月号、No.58、などがある。
- 25) Wilhelm Ribhegge, "Das Parlament als Nation, Die Frankfurter Nationalversammlung 1848/49", Droste Verlag, Düsseldorf, 1998.
- 26) ebenda., S.144.
- 27) ebenda., S.144.
- 28) ebenda., S.145.
- 29) ebenda., S.146.
- 30) Wolfgang Hardtwig, "Revolution in Deutschland und Europa 1848/49", Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1998. W.ハルトヴィッツは1985年 "Vormärz, Der monarchische Staat und das Bürgertum", (Deutscher Taschenbuch Verlag, München) を書き、Otto

- Brunner/Werner Conze/Reinhart Koselleck (Hrsg.), "Geschichtliche Grundbegriffe", Bd.6, Ernst Klett Verlag, Stuttgart, 1990. では"Verein"(SS..789-823)の項目を受け持っている。
- 31) ebenda., S.7.
- 32) ebenda., S.7.
- 33) ケルブレは最近、次のような比較史研究の書を公刊している。Hartmut Kaelble/Jürgen Schriewer(Hrsg.), "Diskurse und Entwicklungspfade, Der Gesellschaftsvergleich in den Geschichts- und Sozialwissenschaften", Campus Verlag, Frankfurt a. M., New York,1999. H.Kaelble,"Der historische Vergleich, Eine Einführung zum 19. und 20. Jahrhundert", Campus Verlag, Frankfurt a. M., New York, 1999.
- 34) Hartmut Kaelble, "1848 : Viele nationale Revolution oder eine Europäische Revolution?", in der "Revolution in Deutschland und Europa 1848/49", S.273.
- 35) Heinz-Gerhard Haupt/Dieter Langewiesche(Hrsg.), "Die Revolution in Europa 1848, Reform der Herrschafts- und Gesellschaftsordnung, Nationalrevolution , Wirkungen"
- 36) ebenda., S.35.
- 37) ebenda., S.35.
- 38) ebenda., S.37.
- 39) ebenda., S.39.
- 40) L.Gall/D. Langewiesche(Hrsg.), "Liberalismus und Region", in der "Historischen Zeitschrift", Beiheft 19, Oldenbourg Verlag, 1995, München.
- 41) Dieter Langewiesche (Hrsg.), "Demokratiebewegung und Revolution 1847 bis 1849, internationale Aspekte und europäische Verbindungen", G.Braun GmbH & Co., Karlsruhe, 1998.
- 42) ebenda., S.192.
- 43) ebenda.,SS.188-189.
- 44) オッフエンブルク市はすでに1997年9月12-14日にオッフエンブルク集会150周年記念祭を催し、"Offenburger Freiheitsheft", Michael Friedmann(Hrsg.), G.Braun GmbH & Co., Karlsruhe, 1996.および"Offenburger Freiheitsblätter", Museum im Ritterhaus(Hrsg.), G.Braun ,GmbH & Co., Karlsruhe, 1997.各48頁のパンフレットを出し、さらにRainer Schimpf, "Offenburg 1802-1847",.Braun GmbH & Co., Karlsruhe,1997. およびFranz X. Villmer, "Offenburg 1848/49",G.Braun Verlag, Karlsruhe, 1997.そして本文で紹介したD.ランゲヴィーシェ編集の"Demokratiebewegung und Revolution 1847 bis 1849",1998. の三冊を公刊した。一つの都市が行なう独自の文化活動としては特に目立った。
- 45) Christian Jansen/Thomas Mergel(Hrsg.),"Die Revolutionen von 1848/49, Erfahrung-Verarbeitung-Deutung", Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1998.
- 46) ebenda., S.7.
- 47) ebenda., S.12.
- 48) Christof Dipper/Ulrich Speck (Hrsg.), "1848 Revolution in Deutschland", Insel Verlag, 1998.
- 49) Michael Wettengel, "Die Revolution von 1848/49 im Rhein-Main-Raum", Wiesbaden,

1989. M. ヴィッテンゲルはこの書で1848/49年革命を政治的協会の運動に基礎づけられたものとして捉え、ライン＝マイン地方の協会運動の詳細な研究を行っている。P. ノルテは (Paul Nolte, "Gemeindebürgertum und Liberalismus in Baden 1800-1850", Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1994.) L. ガルの初期自由主義研究やD. ランゲヴィーシェの地域・地方紙研究を枠組として受け入れて、バーデンにおける自由主義の事例研究を行なった。ズィーマンはすでに1985年、社会史の成果を取り入れた1848/49年革命研究を単著として発表 (Wolfram Siemann, "Die deutsche Revolution von 1848/49", Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M., 1985)。
- 50) Dipper/Speck(Hrsg.), "1848 Revolution in Deutschland", S.169.
- 51) ebenda., S.164.
- 52) ebenda., S.169.
- 53) 抽稿「揺籃期のドイツ自由主義と協会運動－1830,40年代の民衆運動－」(『専修経済学論集』第31巻第2号、専修大学経済学会、1996年11月)、「ザクセンにおける1848/49年革命と協会運動－1849年5月蜂起を中心に－」(『一八四八年革命の射程』、および「1848/49年の労働者－過渡期のゲゼレとHandarbeiter－」(『情況』1998年7月号別冊) 参照。
- 54) 彼女は自身の編集になる "Schimpfende Weiber und patriotische Jungfrauen, Frauen im Vormärz und in der Revolution 1848/49", Moos & Baden-Baden, 1986. において、三月前期と1848/49年革命における女性の社会運動参加のあり方を研究する視点として次のように述べていた。「われわれはたいてい男性のパートを共に考えるが、恐らくわれわれの叙述は、『男性の歴史』がたびたびそうであるのと同様に『一面的』に見えるだろう。」
- 55) Jansen/Mergel(Hrsg.), "Die Revolutionen von 1848/49, Erfahrung-Verarbeitung-Deutung", S.98.
- 56) そのうちのいくつかを列挙する。
- Wolfgang von Hippel, "Revolution im deutschen Südwesten, Das Großherzogtum Baden 1848/49", W.Kohlhammer, Stuttgart, 1998.
- Hans-GeorgWehling/AngelikaHauser-Hauswirth(Hrsg.), "Die großen Revolutionen im deutschen Suedwesten", W.Kohlhammer, Stuttgart, 1998.
- Kurt Hochstuhl, "Schauplatz der Revolution in Baden, Gernsbach 1847-49", Casimir Katz Verlag, 1997.
- Otto Borst(Hrsg.), "Südwestdeutschland, Die Wiege der deutschen Demokratie", Silberburg-Verlag, 1997.
- Alfred Georg Frei /Kurt Hochstuhl, "Wegbereiter der Demokratie, Die badische Revolution 1848/49, Der Traum von der Freiheit", G.Braun, Karlsruhe, 1997.
- Rainer Wirtz, "Widersetzlichkeiten, Excesse, Crawalle, Tumulte und Skandale, Soziale Bewegung und gewalthafter Protest in Baden 1815-1848", Nomos Verlagsgesellschaft, Baden-Baden, 1998.
- Heinrich Raab, "Revolutionäre in Baden 1848/49", Kohlhammer, Stuttgart, 1998.
- Volker Watzka/ Gerhard A. Auer(Hrsg.), "Die Sonne der Freiheit, Die Revolution von 1848/49 im Oberamt Emmendingen und den Bezirksämtern Denzingen, Waldkirch", Meisterdruck, 1997.
- Peter Blastenbrei, "Mannheim in der Revolution 1848/49", Verlagsbüro v. Brandt,

Mannheim, 1997.

その他の地方の革命史研究は

Hans-Werner Hahn/ Werner Greiling(Hrsg.), "Die Revolution von 1848/49 in Thüringen", Hein Verlag, Rudolstadt, 1998.

Arbeitskreis der Archiev im Rein-Neckar-Dreieck(Hrsg.), "Der Rhein-Neckar-Raum und die Revolution von 1848/49, Revolutionäre und ihre Gegenspieler", Verlag Regionalkultur, Ubstadt-Weiher, 1998.

Hermann Reiter, "Die Revolution 1848/49 in Bayern", Pahl-Rugenstein, Bonn, 1998. Rüdiger Hachtmann, "Berlin 1848, Eine Politik- und Gesellschaftsgeschichte der Revolution", Verlag J.H.W.Dietz Nachfolger, Bonn, 1997.

Volker Klemm, "Das Revolutionsjahr 1848 im preussischen Regierungsbezirk Frankfurt an der Oder", Verlag Hermann Böhlaus Nachfolger Weimar, Weimar, 1998. その他、本文で取り扱えなかった書として

Manfred Hettling, "Totenkult statt Revolution, 1848 und seine Opfer", S.Fischer, Frankfurt a.M.,1998.

Wolfgang J. Mommsen, "1848, Die ungewollte Revolution", S.Fischer, Frankfurt a. M., 1998.

Günter Mick, "Die Paulskirche, Streiten für Einigkeit und Recht und Freiheit", Verlag Waldemar Kramer, Frankfurt a. M., 1997.

Sophia Kemlein, "Die Posener Juden 1815-1848, Entwicklungsprozesse einer polnischen Judenheit unter preussischer Herrschaft", Dölling und Galitz Verlag, Hamburg, 1997.

- 57) 揺るぎなく「特殊な道」テーゼに依拠しているのは、マルクス主義者のものであった。旧DDRの歴史家でフランクフルト国民議会に関する研究成果を発表し(Gunther Hildebrandt, "Politik und Taktik der Gagern-Liberalen in der Frankfurter Nationalversammlung 1848/49", Akademie-Verlag, Berlin, 1889)、"Männer der Revolution von 1848"(Akademie-Verlag, Berlin, 1987, 1988)の中で執筆を担当していたグンター・ヒルデブランド、1848/49年革命140周年を機に旧DDR時代に出版された『1848/49年ドイツ革命の描かれた歴史』("Illstrierte Geschichte der deutschen Revolution 1848/49", 1988)の編集人であり、全12巻の『ドイツ史』第4巻では("Deutsche Geschichte", Bd.4., VEB Deutscher Verlag der Wissenschaften, Berlin/DD R,1984)執筆グループの指揮をとったヴァルター・シュミットなどが加わった"Revolution in Deutschland, Radikale Kräfte 1848/49", (Hrsg.v. Johannes Klotz, Distel Verlag, Heilbronn, 1998) がそれである。クリストフ・ディッパーとウルリッヒ・シュベック編集の『1848年、ドイツにおける革命』執筆陣の一人ハルトムート・ツヴァーを除いて(本文参照)、入手しえた新刊本の中で旧DDRの著名研究者も加わっているのは、103頁の小さな本これ一冊だった。同書の中でヒルデブランドは「1849年春のフランクフルト国民議会とバーデン立憲議会」(G. Hildebrandt, "Die Frankfurter Nationalversammlung und die badische Konstituierende Versammlung im Fruejahr 1849")を、シュミットは「マルクスと1848/49年の革命、マルクスの革命コンセプト」(Walter Schmidt, "Marx und die Revolution von 1848/49. Das Marxsche Revolutionkonzept")を書いている。その中で「ドイツ史における1848/49年革命の位置」(Reinhard Kühnl, "Der Ort der Revolution von 1848/49 in der deutschen Geschichte")

を書いたラインハルト・キューンル（マールブルク大学）は次のように述べている。「革命の敗北は、ドイツの特殊な道が確定され、この特殊な道の一貫した続行を……可能にする権力状況が生み出されうることを意味した」（S.28）。また同書の中でバーデン革命の指導者グスタフ・フォン・シュトルーフとフリードリヒ・ヘッカーについて、短文を寄せているゲルト・マイアー（Gert Meyer, "Friedrich Hecker - Ein Lebensbild des badischen Revolutionaers aus der Feder Gustav Struves"）は、彼らと共に多くの革命人が革命後アメリカ合衆国に渡って南北戦争を戦ったのはいいが、反面でドイツにおける民主主義の潜在力が減少したという。すなわち「この“主体的ファクター”ものちの歴史にネガティブに作用し、“ドイツの特殊な発展”を促進した」（S.96）という。彼もまた「特殊な道」テーゼを前提としている。

- 58) D.Blackbourn, G.Eley: "Mythen deutscher Geschichtsschreibung, Die gescheiterte bürgerliche Revolution von 1848", Frankfurt a. M., Berlin, Wien, 1980、デーヴィッド・ブラックボーン／ジェフ・イリー／望田幸男訳『現代歴史叙述の神話—ドイツとイギリス—』晃洋書房、1983年。
- 59) 松本彰「『ドイツの特殊な道』論争と比較史の方法」、『歴史学研究』No.543, 1985.7.青木書店、参照。
- 60) 以上、望田幸男訳『現代歴史叙述の神話—ドイツとイギリス—』、「第一編 ドイツ特有の道とイギリス・モデル」参照。
- 61) 望田訳『現代歴史叙述の神話—ドイツとイギリス—』115頁。
- 62) Hans-Ulrich Wehler, "'Deutscher Sonderweg' oder allgemeine Probleme des westlichen Kapitalismus?", in der "Politik in der Geschichte", Verlag C.H. Beck, München, 1998. この論文の初出は"Mercur", 35. 1981. Jürgen Kocka: "Der "deutsche Sonderweg" in der Diskussion", in "German Studies Review, Volume V, Number 3, October 1982.
- 63) Wehler, S.90.
- 64) Kocka, S.375.
- 65) "Spiegel", S.54-55.
- 66) Dieter Dowe, Heinz-Gerhard Haupt/Dieter Langewiesche (Hrsg.), "Die Revolution in Europa 1848, Reform der Herrschafts- und Gesellschaftsordnung, Nationalrevolution, Wirkungen", in "Die Revolution in Europa 1848, Revolution und Reform", S.30.
- 67) Dieter Langewiesche (Hrsg.), "Demokratiebewegung und Revolution 1847 bis 1849, internationale Aspekte und europäische Verbindungen, Internationale Aspekte und europäische Verbindung", G.Braum GmbH, Karlsruhe, 1998.
- 68) D.Langewiesche, "Die Revolution von 1848/49 im europäischen Kontext", in der "Demokratiebewegung und Revolution 1847 bis 1849", S.186-187
- 69) Jansen/Mergel (Hrsg.), "Die Revolutionen von 1848/49", S.10.
- 70) ebenda.,S.10.
- 71) Wolfram Siemann, "Die deutsche Revolution von 1848/49", Suhrkamp Verlag, 1985.なおこの書は1998年、英訳された。"The German Revolution of 1848-49", Macmillan Press, 1998.
- 72) ebenda., S.15.
- 73) ebenda., S.223.

- 74) W. Siemann, "Gesellschaft im Aufbruch Deutschland 1849-1871", Suhrkamp, Frankfurt.a.M., 1990.
- 75) ebenda., S.229.
- 76) ebenda., S.229.
- 77) G.Jansen/T.Mergel(Hrsg.), "Die Revolutionen von 1848/49", S.12.
- 78) Heinrich August Winkler, "Streitfragen der deutschen Geschichte", C.H.Beck Verlag, München,1997. S.124.
- 79) ebenda., S.141.
- 80) ebenda., S.146.
- 81) "Süddeutsche Zeitung", 17.Okt. 1998.

〈編集後記〉

今月号は、村上所員の論文です。ドイツにおける1848/49年革命が、150周年に当たる去年から今年にかけてどのように祝われたかを問いつつ、そこから歴史認識と政治的立場の問題に肉迫しようとする興味深い論考です。

先日経済学部教授会で、現在の『経済学論集』は専門的にすぎる、学生にも読めるように編集方針を変えていく必要がある、との問題提起がなされました。正論です。振り返って社研の月報、年報はどうでしょうか。学部紀要と研究所の所報とは違って当然だ、という議論もすぐに聞こえてきそうです。たしかに専門的にすぎるから啓蒙的文章で、というのでは話になりませんが、高度の専門論文を一般学生にも読めるように書くことは必要ではないでしょうか。学生のレベルの問題もあって、大変な難題ですが、読者としての学生(=素人)を想定して専門論文を書くことは案外学問生産の本質にかかわっていて、重要な仕事なのかもしれません。

よい夏休みを!

(編集子S)

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

(発行者) 古川 純

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
